

冬月 律 提出 学位申請論文

『過疎地神社の研究―人口減少社会と神社神道―』審査要旨

### 論文の内容の要旨

本書『過疎地神社の研究―人口減少社会と神社神道―』は、「過疎が神社と地域にどのような影響を与えたか、過疎地域の氏子を含む地域住民と祭祀との関わりはどのようなものなのか」を、高知県高岡郡旧窪川町（現四万十町の一部）を対象に、長年にわたる丹念なフィールドワークによる調査研究によってまとめた成果である。

本書の構成は、第一部の研究史編、第二部Ⅰ（量的調査を中心に）、第三部Ⅱ（質的調査を中心に）の実態調査編の大きく三部よりなる。最後に研究のまとめとしての終章が付されている。

第一部の研究史編では、第一章で過疎化を広義の社会変動として捉えた上で、

社会変動の枠組みの視点から神道と過疎化に関する研究史を取り上げ、過疎法への言及に始まって、戦後の先行研究の歴史と問題点を洗い出している。また第二章では、神社は過疎化にどのように反応・対応してきたかを把握するために、神社本庁や神社庁が実施してきた組織的な実態調査の内容を検証し、過疎地域における神社に関する実態調査の歴史を精査し課題を見出している。

第二部と第三部が本書の中心部分で、申請者が実施した量的調査と質的調査によって得られた過疎地域を氏子の現状と課題に関して詳細に報告されている。

第二部の実態調査編Ⅰ（量的調査を中心に）では、過疎地域の神社と氏子を対象に実施した実態調査を中心に論じている。第三章過疎地神社の実態調査は第四章以降の具体的な実態調査の序論的位置にあたる章である。昭和五二年に神社本庁が刊行した『過疎地帯神社実態調査報告』のうち、高知県高岡郡の地域を対象に行われた実態調査の追跡調査の結果を通して、四〇年間の地域と祭祀の変化を中心に比較を試みている。第四章過疎地神社の現況は、過疎と神社神道の変化を探求する際に重要な過疎地域の神社神道の変容（内部と外部の変化）に

ついて論じている。神社一般、神職、祭祀・行事、氏子生活などといった、外部（外形的）条件の変化に着目して過疎地域である旧窪川町の神職を対象にした全神社（宗教法人）の実態調査の結果を提示することで、過疎地神社の現況と課題を明らかにしようと試みている。第四章の後に「附論1 過疎地神社の神職―旧窪川町の神職座談会から」が付されている。旧窪川町の神職を対象にして座談会を開催し地域と氏子との関わりをはじめ、神社の課題と将来などについて、神職（宗教者）の立場から現状と見解を把握しようとした試みである。そして第五章では、旧窪川町の氏子（実質氏子と祭礼氏子）を対象に実施した意識調査の結果を分析している。第四章の神社調査とあわせて氏子に対する意識調査を実施することで、神社が置かれている状況をより詳細に把握しようと試みている。

第三部の実態調査編Ⅱ（質的調査を中心に）は、神社を支えてきた氏子に焦点をあて、慣習的に継承されてきた役割と（氏子）組織の変容や神社の維持継承について論じている。第六章では、旧窪川町を構成する八〇集落のうち、伝統的村落型社会と都市型社会の集落を複数か所取り上げて、集落の氏神信仰と氏

子意識の現況と課題を明らかにしようとする。五つの地域の住民にそれぞれインタビューを敢行し、ライフヒストリー分析を行うことで、神社の護持運営に対する各集落の見解を把握し課題を整理している。第三部には附論2が付されている。旧窪川町の小規模集落である松生原の花取踊りの継承活動を取り上げ、伝統芸能を活用して氏神信仰の継承と氏子意識の高揚に努力している事例を提示している。

終章では、これまでの各章で述べてきた要点を整理し、実際に調査から得られたデータに基づいた過疎地神社を三つの視点、「神社の氏子」「神社の運営」「神社の将来」から分析している。そして今後の神社の在り方に関しては、「神社行事に積極的に参加し、神職と日常的な交流がある氏子が多いか少ないか」、「氏子区域内に居住する実質・祭礼氏子の割合と氏子費を納めている割合の高低」を軸として4つの象限に分け、I「条件なし・維持可能神社」、II「一部条件あり・維持可能神社」、III「条件あり・維持可能神社」、IV「維持不可能神社（不活動神社）」を設定している。

そして最後に、過疎地問題と神社の関係は、「問題の所在が多岐に分かれていること、そしてそれぞれの問題が地域ごとに異なる特色・土地柄・風土・(伝統)文化といった、いわゆる「地域性」(多重構造)の中で考察」する必要があることを指摘して、今後の課題としている。

#### 論文審査の結果の要旨

本書の特徴で、かつもっとも評価されるべきは、特定地域の長期間にわたる調査研究であるという点である。過疎化は昭和40年代に指摘され、その後深刻さを増していった。20世紀終わりには過疎化ではその深刻さを表現できないとして限界集落という表現が使用されるようになった。少子高齢化が地方においてより峻厳であることは衆知の事実である。

地域社会との繋がりが強い、地域文化の中核とも考えられる神社は過疎化や少子高齢化に大きな影響を受けていると考えられたが、つぎつぎに過疎地の神

社が祭祀を中断したとか、解散、吸収合併が相次ぐ状況で神社数が大幅に減少しているという事実は存在していない。

地域社会における神社の実状については、これまでも単発的散発的な現地調査や動向の全体を概観しようとする試みは実施されてはきた。しかしながら過疎化や高齢化が神社にどのようなプロセスでどのような影響を与えるかについては、断片的な分析に留まっていた。申請者は現地である旧窪川町に10年以上にわたって通い続け、地域の人々との信頼関係を構築し、インタビュー調査、座談会、アンケート調査を実施して、多角的に現地の状況や過去の経緯を引き出そうと試みた。その結果、地域社会との変化と神社との関わりに関して三つの視点を見出し、変化の方向性に関して四つの方向性を指摘した。こうした点は高く評価されて然るべきと考える。

他方で、本書が採用したきめ細やかな調査と分析が、それゆえに欠点を持つことになったこともたしかである。つまり、旧窪川町を構成する個々の集落にまで丹念に足を運び状況を把握したために集落間の差異に分析が集中し、旧窪

川町全体としての地域社会の変動と祭祀の関係が必ずしも十分に分析しきれなかった。

本来の目的は戦後の社会変動と神社との関係であり、社会構造の変動によって生じる地域社会と神社の関係が、時間的な経過を背景にして探求されなければならなかったにも関わらず、集落間の相違に気づくことで、現状の理解に留まりかねない視点の提示に留まっているように思える。同じ旧窪川町の集落であるにもかかわらず、なぜこうした類型が生じたのか、従来からの地域差なのか、それとも社会変動によるものかが必ずしも明らかではない。理論面では、冒頭で望月哲也の戦後の社会変動と宗教に関する二期の分析を引用しながらも、終章に至るまで、戦後の変動期に関する考察は見当たらない。望月の分析や理論は最終章では参照されず、代わって社会変動と神道に関しては平井直房、社会変動と神社祭祀の構造に関しては伊藤幹治の一連の考察が背景にあるとしているが、引用される両者の文献は昭和三〇年代後半から四〇年代のものである。四〇年代以降の分析の検討は行われていない。

不十分な点は用語の利用にも垣間見られる。現状分析のための分類のために氏子の概念に新しい考え方を導入したが、これまで研究で言及されてきた概念との十分な整合性は担保されていない。分析方法に関しても、ライフヒストリー分析など、申請者がインタビューを部分的に入れ替えたりピックアップして時代との関わりに注釈を付ける程度に留まっている。分析に重要な素材と考えられる神職の座談会も、附論として掲載されているだけで、分析の領域まで踏み込めなかった。

右記のように、本書には少なくない不十分な点が見られるが、それらを考慮しても、本書が過疎化や限界集落化する地域における神社を論じようとした場合に、あるいは現今の社会変動と宗教を考察しようとした場合には、必ず言及される文献であることは明かである。

以上述べてきた所見はやや厳しい評価に過ぎたかもしれない。本論文が考察した事例と結論は、変容するメディア環境における宗教のあり方を考察する際の十分な検証と考えられる。本書で扱いきれなかった事例や分析は今後の成果



となつて近々現れるだろうことは十分に期待できる。

以上の審査結果をもつてすれば、本論文の提出者冬月律は、博士（宗教学）の学位を授与せられる資格があると認める。

令和二年十二月四日

主査	國學院大學教授	石井 研 士	印
副査	國學院大學教授	黒崎 浩 行	印
副査	國學院大學准教授	藤本 頼 生	印
副査	皇學館大學名誉教授	櫻井 治 男	印

冬月 律 学力確認の結果の要旨

左記四名が各専門分野からそれぞれ学力確認の試験を行った結果、博士(宗教学)の学位を授与される学力があることを確認した。

令和二年十二月四日

学力確認担当者

主査	國學院大學教授	石井 研 士	印
副査	國學院大學教授	黒崎 浩 行	印
副査	國學院大學准教授	藤本 頼 生	印
副査	皇學館大学名誉教授	櫻井 治 男	印